研究ノート

古代ギリシア語の授与動詞構文についての補足的研究：拙論(1995)への補遺

近松　明彦

0. 序

拙論 (1995) において、古典ギリシア語の基本語順を調べるべく、エウリピデスの作品から didoomi「与える」という動詞を含んでいる例文をピックアップして、分析した。その結果、古典ギリシア語の二重目的語において、「対格－与格」の語順が基本であり、「与格－対格」という語順が派生的に生じたものであることが判明した。しかし、このほかに名詞句が 2 つの部分に分離している用例がある。このような「対格－与格－対格」および「与格－対格－与格」の語順については、与格、対格のいずれが先行するのかが曖昧であり、スペースの制限などもあって、考察の対象から除外していた。用例数がいまだ少数なのであるが、本稿では、「対格－与格－対格」および「与格－対格－与格」の語順について、拙論(1995)を補足したい。エウリピデスの作品から didoomi「与える」という動詞を含んでいる例文をピックアップした。使用テキストは、THE LOEB CLASSICAL LIBRARY の、EURIPIDES, I－IV の中の次の作品である。

ALKEESTIS (Al), ANDROMAKhEE (An), EKABEE (Hc), EERAKLEIDAI (Hr), EERAKAEES MAINOMENOS (HF), IPPOLYTOS STPhANEEPhOROS (Hi), IOON (Io), MEEDEIA (Md), IKETIDES (Su), TROOIADES (Tr)

((　) 内は略称)

尚、本稿は、拙論 (1995) と同様、機能的構文論 (functional sentence perspective) と呼ばれる考え方を採用している。これは、「文の要素が、それらの担う伝達情報の量に応じて、少ないものから多いものへ順に並べられる」(福地, 1985:2.3.3.)という仮説である。

1.「与格－対格－与格」タイプと「対格－与格－対格」タイプの出現頻度の比較

「与格－対格－与格」タイプは 89 例中 4 例 (4.5%)、「対格－与格－対格」タイプは 89 例中 19 例 (21.3%)となっている。このように、「対格－与格－対格」の方がかなり多い。

2.「与格－対格－与格」タイプの特徴

ここではまず、対格を挟む形で両側にある与格の名詞句を中心に見てゆきたい。このタイプには次のような下位タイプが見出される。

2.1.「代名詞－x」タイプ

このタイプは 2 つの与格の名詞句のうち左側の名詞句に代名詞が立ち、右側の与格の名詞句に、より実質的・具体的な意味を持つ要素（名詞句・形容詞・関係節など）が来る。

例えば、

(1) autooi tauta soi didoom' ekʰein. (Hc 1276)
Dat Acc Dat
「あなた自身にこれらを持つようにあげる」

(1)では、先ず強意代名詞・与格形の autooi が現れ、その次の対格形 tauta を間に挟む形で 2 人称の与格形の人称代名詞 soi が来る。ここでは右にある与格の名詞句も代名詞ではあるが、左側の強意代名詞に比べて、より実質的な意味を持つとは言えないであろうか？次に(2)を取り上げたい：

(2) keinooi men, oo geraie, paida Loxias edooken, idiai d' eutukʰei
Dat Acc Dat Dat
tautees dikʰa. (Io 775)
「ああ老人よ！彼にはロクシアスが子供を与えたのです。この女性は別として、幸運なその人自身に。」

(2)では、まず、代名詞の与格形 keinooi「彼に」を立て、次に対格形の名詞句 paida「子供を」が生じ、文末近くで再び与格形である idiai (d') eutukʰei「自分自身の・幸福な」という形容詞を付け加えている。ここでもやはり、左側の与格形は実

質的あるいは語彙的意味を持たず、右側の与格が具体的な意味を賦与しているように見える。引き続いて、(3)を見てみよう：

(3)...., all'hapas stratos

ktanein emoi s' edooken, <u>honper eedikeis</u>. (Tr 902)

Dat Acc

「…全陣営があなたを、あなたが害を加えようとした私に、殺すようにと、引き渡してくれた」

(3)においては、与格形の 1 人称の人称代名詞 emoi が来て、s'(<se)という 2 人称対格の代名詞を挟む形で、更に右側にある honper の節が先の与格形 emoi を修飾するのである。honper の節は無論与格形の実詞ではない。しかし、emoi と共に一つの名詞句を成す所から、「与格－対格－与格」に準ずるものとして見なした。ここでも emoi という代名詞が左にあり、それを具体的に修飾する関係節が右側にある。

以上このタイプに属するものは計 3 例見出される。これらの例では、いずれも与格の名詞句が左右に分かれて存在し、そのうち、左側に代名詞が現れ、右側に、より具体的な意味を持つ要素が来る。これは、情報量の低い要素は左へ、情報量の高い要素は右に行くという談話の原則による現象ではないであろうか。尚、この現象は hyperbaton の一つと見做し得ることと思われる。竹島(1986)は、hyperbaton において外置される要素の選択を、「文末焦点」の原則で説明している。また、英語には、左方転移 (left dislocation) という随意的な規則がある。

(4) a. Mary will never marry Schwarz.

b. Schwarz, Mary will never marry him. (安井, 1975)

左方転移によって、例えば、(4a)から(4b)が導かれる[1]。後者の文では、Schwarz という具体的な名詞があり、右端に him という人称代名詞（Schwarz を指す人称代名詞）が来る。これは、我々の例とは逆の順序である。以上のことから、我々の例に見られる構造が、左方転移とは逆方向（右向き）の移動によって生じたのではないかという想像も可能かも知れない。

2.2.「名詞－x」タイプ

それに対して、左側の与格の名詞句に名詞が立つ例は 1 例しか見出されない。

(5) ha d' cipon eis hapantas ouk arneesomai, Troias halousees

andri tooi prootooi stratou seen paida dounai sp^{h}agion exaitoumenooi .

Dat (Noun) Acc Dat (Part)

(Hc 305)

「私が全ての人々に言った事、（つまり）トロイが捕らえられると、生け贄を求める陣営の一番の男にあなたの子供を与えるという事を、私は否定しない」

(5) では、andri tooi prootooi (stratou)「（陣営の）第一の男に」を修飾する現在分詞の句、(sp^{h}agion) exaitoumenooi「（生け贄を）求める･･･」が後置されている。

3.「対格－与格－対格」タイプの特徴

ここでは主として与格の名詞句を挟んで両側に位置する対格の名詞句の関係について見てみたいと思う。

3.1.「名詞－名詞」タイプ

与格の名詞句を挟んで両側に位置する対格の名詞句がいずれも名詞になっている用例がある。これら 2 つの対格形は互いに同格であるものの、両者に叙述関係がある。つまり、一方が目的語、他方が目的格補語という関係にある。

(6) en hee me t^{h}repsas olbiois en doomasin Ait^{h}ran pateer didoosi

Acc

tooi Pandionos Aigei damarta, Loxiou manteumasin: (Su 6)

(Dat / Art) (Gen) Dat Acc

「その中で、幸福な家で私を育て、（私）アイトラを、父はロクシアスの神託でパンディオンの（息子）アイゲウスに妻として与える」

類例：Md 1322, Tr 536.

3.2.「代名詞－x」タイプ

このタイプは、既に、2 節の「与格－対格－与格」タイプにおける「代名詞－

x」タイプ（2.1.節）に平行するタイプである。

(7) tade soi didomen
Acc 1 (Pron) Dat (Pron)
pleegmata kratos sternoon te kopous. (Tr 793)
Acc 1 (Noun) (Acc 2)
「あなたのために、正にこの頭への一撃を、また胸への打撃を、（私たちは）加える」

これらもまた、情報量の少ない代名詞が左側に先行し、具体的意味を持った要素が右側に後置されるのである。

類例：Su 409, Hc 853, Al 60, Hc 899, Md 719.

3.3. その他

次に、「代名詞－x」タイプのような談話の原則に従った現象の見出し難いタイプを挙げたい。

3.3.1.「名詞－x」タイプ

このタイプは、左の対格に名詞が、右の対格に人称代名詞・形容詞等が来るタイプである。

(8)... tʰeou kataskeueen biooi
Acc (Noun) Dat
dontos toiauteen, ... (Su 215)
Acc (Pron. Adj.)
「神がこのような仕組みを生活のために与えて下さり･･･」

(8)では、左の対格に、kataskeueen「仕組み」という名詞が来、右の対格に toiauteen「このような」という形容代名詞が来ている。

類例：An 969, HF 19

3.3.2.「形容詞－x」タイプ

(9)では左側の対格の名詞句に形容詞が現れ、右側の対格の名詞句としてまっ

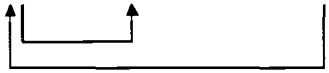
たき名詞が生じている。

(9) kakon gar autois noston anti toond' egoo doosoo. (Hr 1043)
Acc (Adj) Dat Acc (Noun)
「これらのことに対して、ひどいお返しを私は与えよう」

3.3.3. 擬似－「対格－与格－対格」タイプ

このタイプでは左側に対格が生じ、その対格形を修飾する要素が、対格以外の形（属格形、前置詞など）で、与格の名詞句を挟んで右側に来るタイプである。右端の名詞句は対格ではないが、統語的には左端にある対格名詞句と一まとまりの名詞句を成す。従って、このタイプも「対格－与格－対格」タイプに準ずるものと見做したい。

(10) dos k^{h}eros p^{h}ileema moi sees soomatos
Gen (Noun) Acc Dat Gen (Poss.Adj.)



t' amp^{h}iptuk^{h}as. (Io 519)

「あなたの手への接吻と体を抱擁することを私に許してくれ！」

(10)では左側の対格形 p^{h}ileema「接吻を」に属格形 k^{h}eros「手の」が係り、更に、この k^{h}eros に（moi（与格「私に」）の右にある）所有形容詞 sees が係っているのである。ここでは、moi「私に」、sees「あなたの」という 2 つの人称的要素が隣り合って並べられている。この語順は、このような人称的要素の対照的効果を狙ったものと考えることができるかもしれない。

類例：Tr 907, Tr 700, Io 445, Tr 1245, HF 1328.

4.「与格－対格－与格」タイプと「対格－与格－対格」タイプについての見解とまとめ

これら 2 つのタイプについては、いまなお、分析が十分でなく、結論を明らかにすることは出来ないが、ここで、現在における筆者の考えを述べておきたい。

これら 2 つのタイプの用例の多くは、所謂、hyperbaton という現象によって、2 つの名詞句のうち、いずれかが分裂する仕方で、派生されたものと想像される。ところで、竹島(1986)は hyperbaton について次のように説明している：

「･･･、形容詞、名詞の属格が名詞を修飾する場合に、修飾する語と修飾される語は切り離されて、両者のどちらかが構文の外に押し出される、･･･」（竹島, 1986:1.1.4.）

つまり、hyperbaton は名詞句からの外置である。外置が、通常、右方向への移動によってもたらされると仮定すると（例えば、英語の It－that の構文などを想起されたい）、「**与格－対格**－与格 $_{EXTRA}$」は「**与格－対格**」の構文から、また、「**対格－与格**－対格 $_{EXTRA}$」は「**対格－与格**」の構文から、それぞれ派生されたものと仮定される。

ところで、「与格－対格」と「対格－与格」とでは、後者の方が、頻度において優勢であった。従って、「対格－与格」から「対格－与格－対格」が派生されたとするなら、（そして、外置操作の適用率が「対格－与格」、「与格－対格」の間で大差が無ければ）「対格－与格－対格」の方が、「与格－対格－与格」よりも頻度が高くなることが予想される。

そこで、実際に調べてみると、「与格－対格－与格」タイプは 89 例中 4 例 (4.5％)、「対格－与格－対格」タイプは 89 例中 19 例 (21.3％) であり、「対格－与格－対格」タイプの方が優勢であることがわかる。極く大雑把に言っての事ではあるが、上の予想が一応確認されたことになる。

註

＊) 本稿をまとめるに当たり、お世話になった多くの方々に感謝申し上げる。本稿のもとになった研究は、拙論 (1995)と同様、1987 年執筆の未発表手稿であり、本稿はその一部に若干の加筆・訂正を行ったものである。

1) 左方転移については、例えば、安井 (ed.) (1975:237) などを参照されたい。本稿では、左方転移を移動規則として扱っているが、これを移動規則ではないとする見方が現在では有力である（原口・鷲尾(1988)などを参照）。

参考文献

Creider, C.A.(1979): "On the explanation of transformations." In Givón (ed.). *Syntax and semantics 12: discourse and syntax.* New York: Academic Press.

原口庄輔・鷲尾龍一 (1988) :『現代の英文法・第 11 巻・変形』, 東京, 研究社.

福地肇 (1985) :『新英文法選書 10・談話の文法』, 東京, 大修館.

Humbert, J. (1954) : *Syntaxe Grecque* (2e. édition), Paris : Editions Klincksieck.

Schwyzer, E. (1950): *Griechische Grammatik,* zweiter Band. München : C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung.

Smyth (1956): *Greek Grammar,* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

竹島俊之 (1985) :「古典ギリシア語の人称表現の実体」, 『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要 V), 第 11 巻.

_____ (1986) :「古典ギリシア語の εἶναι (be 動詞) の用法についての一考察」『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要 V), 第 12 巻.

安井稔 (ed.)(1975) :『新言語学辞典・改訂増補版』, 東京, 研究社.

使用テクスト

EURIPIDES I. (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann LTD. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.(1955)

EURIPIDES II. (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann LTD. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.(1958)

EURIPIDES III. (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann LTD. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (1962)

EURIPIDES IV. (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann LTD. Cambridge Massachusetts: Harvard University Press. (1958)

参照した日本語訳

松平千秋、他 (訳)(1986) :『ギリシア悲劇 III、エウリピデス(上)』(ちくま文庫版), 東京, 筑摩書房.

拙　論

近松明彦 (1995) :「非階層型言語における与格名詞句の位置について : 古典ギリシア語からのデータに基づく機能的分析」,『プロピレア』, 第 7 号, pp.49-62.